

第17回

明朝から清朝へ

監修・講師
 上田 信

学習のねらい

明の洪武帝は、対外関係を朝貢・冊封体制のみに限定し、また海での民間交易を禁止する「海禁」という政策を行う。しかし16世紀、産業が発展し経済が活発になると、海禁を破って海上交易に従事する勢力が、日本の九州に拠点を置き、日本人やポルトガル人なども巻き込みながら、貿易を行う。彼らは「倭寇」と呼ばれ、明を苦しめた。明が農民反乱で滅ぶと、東北部から満州族の清朝が南下し中国全土を支配する。清朝は政治が安定すると、海禁をゆるめ海外との交易が盛んになった。海上交易によって、つながっていく東アジアを、明朝から清朝を通して見ていく。

- ・ <明朝の海禁政策と倭寇>
- ・ 紅巾の乱 明朝 里甲制 倭寇 朝貢 海禁
- ・ <清の成立と鄭成功>
- ・ 銀の経済 北虜南倭 海禁の緩和 清朝 台湾鄭氏
- ・ <日本の「鎖国」と中国>
- ・ 清朝版図の拡大 日清間の貿易 鎖国 長崎

■ ■ ■ 明朝の海禁政策と倭寇 ■ ■ ■

14世紀なかごろ、元朝に対して農民反乱が各地で勃発する。その一つ「**紅巾の乱**」の指導者・**朱元璋**（後の**洪武帝**）は、1368年に南京を都として**明**を建国、元をモンゴル高原へと追いやる。洪武帝は皇帝独裁体制を整え、荒廃した農村に「**里甲制**」と呼ばれる制度を施行し、農民に徴税と治安維持の責任を持たせることで、復興した。

当時、東シナ海では日本を拠点とする武装集団「**倭寇**」が沿岸を襲撃していた。洪武帝は、倭寇と国内勢力が結託することを防ぐため、民間人が海に出ることを禁じる「**海禁**」という政策を行う。また、外国との関係を朝貢に限定し、民間の交易も禁止した。

3代皇帝の**永楽帝**は、北京に都を移してモンゴル勢力に備えるとともに、朝貢国を増やそうと、宦官「**鄭和**」を東南アジアからインド洋沿岸地域に遠征させた。船団の一部はアラビア半島や東アフリカまで達した。

■ ■ 清の成立と鄭成功 ■ ■

経済が復活し始めた16世紀前半、日本で石見銀山が発見される。中国商人たちは、銀と自国の生糸や絹織物を取引した。海禁に対抗するため武装した。後期倭寇と呼ばれる。一方、モンゴル高原でも遊牧民の勢力が増し、明朝を悩ませる。これを「北虜南倭」という。武装海洋商人のリーダーを処刑することで倭寇が沈静化すると、明朝は16世紀後半に海禁を緩和する。

一方、中国東北地方に住んでいた女真じょしんと呼ばれる民族を17世紀はじめに統一したヌルハチは、1616年に後金こうきんを建国。2代皇帝のホンタイジは、モンゴルの君主「大ハン」の称号を得て、国号を「清しん」とした。1644年、明が農民の反乱によって倒れると中国本土へ進攻、明に代わり、中国を支配した。

海禁が緩和され貿易に従事した海洋商人の勢力を背景に、中国商人と日本人女性の間に生まれた鄭成功ていせいこうは清と対決する。1661年、台湾からオランダを追い払い、そこに拠点をおいた。

■ ■ 日本の「鎖国」と中国 ■ ■

鄭成功の死後も存続した台湾の鄭氏政権に対して、清朝は中国沿岸地域の住民を内地に強制移住させ、海禁を強化する。17世紀後半に鄭氏が降伏すると、海禁が緩和され、民間の海外貿易が認められた。清の商人たちは海を渡り、日本と交易を盛んに行った。イギリスなどの西洋の商船も来航するようになった。

18世紀になると、清は領土をひろげ、漢民族に加え、モンゴル民族やチベット族など多民族を有する大帝国として繁栄を迎えた。

17世紀後半、日本では、江戸幕府が後に「鎖国きこく」と呼ばれる海禁政策を行った。オランダと清の商人の来港は、長崎に限定された。中国商人は「唐人とうじん」と呼ばれ、居住地は制限された。中国からは、生糸、絹織物・砂糖が輸入され、日本からは銀・銅が輸出された。他にも、「倭物たからもの」とよばれる干しアワビやフカヒレなどの海産物も、輸出された。

考えてみよう 調べてみよう

- 東アジアの国々はなぜ「海禁」を行ったのか、考えてみよう。
- 16・17世紀にアジアの海を、どのような人々が渡ったのか、調べてみよう。
- この時期に海外から日本にもたらされたものを、博物館などで探してみよう。